

## 木村謙二先生の学長像

松澤 逸 巳

(1987年4月～1997年4月本学在職)

### 1. 木村謙二先生と二つの北星学園

木村謙二先生は、札幌の北星学園短期大学と稚内の北星学園短期大学の二つの短期大学の学長をほぼ同年（札幌12年1カ月、稚内12年）歴任されました。また、札幌の北星学園では幼稚園教諭・保育養成所の所長も兼任しました。私も札幌と稚内の二つの北星学園に勤めていましたので稚内北星学園短期大学の教職員のなかでは、一番長い係わりをもっていたことになります。そこで、木村謙二先生の学長像の一端を述べてみることにします。

### 2. 北星学園女子短期大学学長

札幌の北星学園大学学長の「私立大学というところは、経営がなかなか苦しいには苦しいが、そこには大きな自由があって、やるに値する仕事だ」というすすめに、先生は「およそ一週間祈りかつ考えた」すえ、北海道教育大学教授を退職されて、1973年（昭和48年）3月1日に北星学園女子短期大学学長に就任されました。

1971年（昭和46年）ころから私学経営危機が報じられるようになりました。北星学園でも多額の負債を抱えて経営状態は非常に厳しく、旧態の習慣の抜本的改善が必死の状態でした。学園内の各校ではそれぞれ取り組みをはじめました。1973年5月に“学園事務機構改善委員会”が組織され、全学園的に行動を開始しました。この時期に学長になられた木村先生は「北星に移って見て驚いたことが多かった。殆ど連日といっていいほど、私は学園本部にきて会議をしなければならないことがその一つであった。」「学園事務機構改善委員会は、昭和48年7月にほう大な答申書を理事会に提出されたのである。これを検討するだけでも大変な仕事であった。」と、私学経営の厳しさに直面された感想を述べられています。

また、1973年（昭和48年）11月ころから校長、学長が集まって会議がもたれ、教育の展望への取り組みがはじめられました。この会議は校長、学長、学部長で構成される学園学校会議へと発展しました。この会議の成果は、1974年（昭和49年）3月理事会内の教育委員会が、“学園教育展望私案”として公表しました。「この会議は校長、学長が全く自由な立場で学園全体の教育の展望を語り合うもので、しばしば激論が行われた。」と述べているように、学長は短大のみならず学園全体の教育に思いをよせる広範多岐にわたる業を負うことになりました。1975年（昭和50年）11月には学園学校会議の議長として理事会から諮問された、学園教育の将来問題についての会議を運営し、ハードな日程にもかかわらず1976年（昭和51年）3月に答申されました。この答申に基づいて理事会はこの年の5月31日に“学園教育の将来展望について”を公表しました。これに基づいて各学校では、英知を結集してそれぞれの将来展望の

具体化に向けて取り組み、歩みをはじめました。文部省は1975年に各短大に特色あるカリキュラムを構成するよう短期大学設置基準を改訂しました。このように、学園内外の多くの問題に対処しなければならない多忙な毎日を送られていたのが実相です。

### 3. 稚内北星学園短期大学学長として

木村先生は1985年北星学園女子短期大学学長を退任されました。この頃、北星学園にたいして稚内市から大学誘致のはたらきかけがあり、理事会、教職員組合など全学園的に検討しました。その結果、北星学園は財政について塗炭の苦しみを経験していましたので、教職員は新規事業にたいして強く反対しました。稚内市と深いかかわりをもっておられた先生と、その時の北星学園の時任正夫理事長は別法人ならばという学園内の意向をくみ、学校法人稚内北星学園を創設し、時任先生が理事長候補、木村先生が学長候補兼短期大学設立準備委員長として、短期大学の設立に向けてふみだしました。開学まで紆余曲折がありましたが、当時の稚内市の浜森辰雄市長（現稚内北星学園理事長）をはじめ市職員・市民のご支援と木村先生・事務局員のなみなみならない働きによって開学にこぎ着くことができました。開学当時在職しておられた教職員は、木村先生からの就任の申し込みの内容については記憶に残っていることと思います。1987年（昭和62年）に稚内北星学園短期大学は開学しました。

木村学長は開学と同時に、北星学園女子短期大学では思いもよらなかった定員割れの事態に遭遇しました。これは北星学園の財政危機にもまさる経営危機でした。幸いなことに稚内北星学園短期大学は特に有能な若いスタッフに恵まれていて、一致団結して学生募集に取り組みました。それは最先端の教育活動、市民や市経営者団体への啓蒙・普及活動、高校への北星教育の浸透など可能なかぎりの方法を駆使した活動でした。この活動の発展は4年制大学への移行として結実しつつあります。稚内北星学園短期大学の学長時代は、自ら選ばれた多才な人材に恵まれた宥和な運営を特徴としてあげられます。

### 4. 教育の場を離れなかった学長

北星学園は1954年（昭和29年）夜間一ヶ年の幼児教育専修学校（後の北星学園幼稚園教諭・保母養成所）を開設しました。北海道大学教育学部（学部長城戸幡太郎）がその指導校で、そこに木村先生がおられて教育心理学の講義を担当され、この時から北星学園の教育の一端を担われることになりました。北星学園女子短期大学学長（幼稚園教諭・保母養成所長兼務）の間も関係する学校で講義から離れることなく、退任されるまで31年にわたって講義を続けられました。稚内北星学園短期大学でも教育心理学の講義を担当され、学生と直接接することを心がけられました。

また 木村先生は敬虔なクリスチャンで、札幌・稚内の両北星学園に設けられていた礼拝（アッセンブリーアワー）の時間には必ず参加され、人間性豊かな人格の形成に資する話を担当されたりしていました。こうした学長の姿に啓蒙された学生も多かったのではないのでしょうか。人間としての矛盾には強く立ち向かう学長でした。